



失敗力の育て方

子どもの考える力を奪っていませんか？
失敗をくり返すことで、子どもはちゃんと学んでいきます

親が子どもに望むことはどんなことでしょうか。
「令和時代『親が子どもに望むこと』」ウーマンエキサイト×マチコミ調査
第1位は“失敗しても立ち直る力”46.0%
第2位は“自分の力で道を切り拓けること”38.9%でした。
保護者さまの8割以上が、子どもたちに「失敗しても立ち直る力」と「切り拓く力」をつけてほしいと期待しているようです。
そこで今回は「失敗力」について、中曽根陽子先生にお話いただきました。

中曽根 陽子
Yoko Nakasone

教育ジャーナリスト。教育雑誌、経済誌、新聞連載など幅広く執筆。
海外の教育視察や講演も行う。2014年、「Mother Quest」を立ち上げ、母親力を育てるワークショップなどを定期的に開催。著書に「成功したいなら『失敗力』を育てなさい」がある。



AIの発達で今後10年から20年の間に、総雇用者の半分以上の仕事が自動化されると言われています。自動化できるものはどんどん自動化していったらいい。今、仕事の中身、仕事のあり方、そこに必要とされる能力がどんどん変わってきているのが現実です。
「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」との予測は有名です。つまり、子どもたちが社会に出る頃には、今は無い職業に就く可能性の方が高いということになります。

親は誰もが、子どもが将来なるべく困らないように、と願います。だからこそいろいろやってあげたくありませんね。良い学校に入れて、良い職業に就かせれば将来は安泰なのではないかと思いき、逆算して準備してあげる方もいらっしゃるでしょう。しかし、そういうルールをいくら敷いても、変化のスピードが速いので、そのルールの先があるかどうか分からない時代になっています。今まで通用していたことが通用しなくなっているのです。

新型コロナウイルスの感染拡大により、10年後・20年後に予測されていたことが一気に押し寄せ、思ってもいなかった進化も起きています。日常生活でも、リモートワークが当たり前になったり、対面での買い物ではなくインターネットでの買い物を中心になったりと有無を言わず変化が強いられています。では、急速に変化している時代に子どもたちにはどのような力が必要になるのでしょうか。

実際、社会で求められる能力は既に変化しています。これまでの社会は正解が見つかりやすい社会でした。指示されたことをきちんとできることが評価され、そういう人が社会でも活躍していました。均一した平均的な能力を必要とし、「出る杭は打たれる」という時代でした。

しかし今、正解がない世界では「自ら考えて行動できること」「新たな価値を創造していけること」「いろいろな考えを持った人達とチームで行動できること」が求められています。

今求められているのは、人と違う自分の意見を持って表現できる『出る杭』なのです。

日本の子どもたちは残念ながら、世界と比較しても自己肯定感が低いです。また、いろいろな調査でも上手くできる分からないことにチャレンジしていく意欲が低い、という結果が出ています。自己肯定感の低

さに関しては、日本人は奥ゆかしいので海外の方々のように「私はすごいです」というアピールが民族的に苦手だということを差し引いたとしても、上手くいくか分からないことへの意欲が低いのは非常に残念だと思います。失敗を恐れ、うまくいかなかったらどうしよう、という気持ちが先に立ってしまうと、何にも挑戦できなくなるからです。

変化が激しい時代では、正解が無く、すべてがチャレンジになります。新型コロナウイルス感染防止のために「外出ができない」「対面での授業ができない」という事態に陥った際、「どうしよう…」と固まるのではなく、その状況下でどうしたら良いのかを考え行動し、失敗したとしてもくじけずに、試行錯誤しながら前に進む力が必要なのです。これから先、その力ももっとも必要になります。それを私は「失敗力」と呼んでいます。

そうはいっても親というものは、子どもが失敗すると分かっているながら黙っているのは辛いですね。しかし親が先回りしてすべてお世話し続けていくと、子どもは何も考える余裕もなく、受け身の姿勢が身につけてしまいます。すると自分から何かにチャレンジすることができなくなります。そして失敗の経験がないので、失敗を非常に恐れるようになります。自発性が育っていないまま社会人になるとそこで大変苦労します。ですから、子どものためを思うなら、子どもが親元にいる間に、なるべく小さな失敗をさせてあげることが大切です。

失敗力を持つ子どもに育てるための関わり方についてお話しします。能力は、生まれつき決まっているものだと思いますか？努力することでもいくらでも伸びると思いますか？能力は生まれつきある程度決まっているものだという考えを、コチコチマインドセットといいます。このタイプの人は、失敗が怖くて新しいことにチャレンジしなくなる傾向があるそうです。一方で、能力は努力すれば伸びるという考えは、しなやかマインドセットといいます。このタイプの人は、今はできなくても、やればできるようと考え、どんどんチャレンジしていく傾向があるそうです。（『マインドセット』（草思社）キャロルドウェック著）

たとえば、子どもがパズルを完成させたとき、「もっと難しいものにもチャレンジしてみる？」と促した時、コチコチマインドセットの子はそれ以上のものはできないかもしれないという思いが先に立ち、やりたがりません。

しなやかマインドセットの子は失敗を恐れないので、難しいものにもどんどんチャレンジしたがりです。どちらのマインドを持つかというのは、小さいころからの親の声かけで決まることが多いと言われています。

何度も同じような間違いをする子にたいして、どのような声をかけていますか？

「どうして同じ間違いばかりするの？」と言われたらどんな気持ちになりますか？

「どうして？」は過去にむけて原因を追究する質問です。これを言われてもやる気は出ず、言い訳を考えるようになってしまいます。

こういう時は、「どうしたら同じ間違いをしないようになると思う？」と聞いてあげてください。「どうしたら？」というのは、未来に向けて解決を促す質問です。「どうして」と「どうしたら」、のわずかな違いですが、受け取り側の気持ちは全く違うものになります。子どもたちが自分で考えていけるような声かけや質問をくりかえしていくと、子どもたちがしなやかマインドセットになり、失敗力が育っていきます。「どうしたらよいと思う？」「失敗しても平気だよ」「次はできるようになるよ！」と伝え続けましょう。

子どもたちはみんな未来を創るクリエイターです。誰一人欠けることなく子どもたちみんな宝なのです。一人一人がその能力を発揮して、社会を作り、社会を支え、社会の中核になっていきます。ぜひ子どもたちの能力を伸ばして育ててほしいと思います。

「飲み物をこぼさないように気を付けてね、危ないよ、気を付けて。あっ、ほらこぼした！だから言ったじゃない！！」このような会話に心当たりはありませんか？中曽根先生に言い換えの言葉を教えていただきました。「上手に運んでね」「上手に飲んでね」子どもは嫌な気持ちになることなく気を付けてくれるそうです。それでもこぼしてしまったときは…どうしたら良かったかを考えて、次に活かしましょう。親元にいる間に小さな失敗をたくさんさせて、令和で生き残るための「失敗しても立ち直る力」や「自分で切り拓く力」をつけましょうね。子どもは失敗を繰り返すことでちゃんと学んでいきます。いつまでも飲み物をこぼしてばかりではありません。子どもを信じてグッとこらえましょう♪

